

□海外文献紹介□

**非潰瘍性消化不良症における幽門
前庭部 mast cell 数の検討**

Evaluation of antral mast cells in nonulcer dyspepsia: *Matter SE, et al* (Dig Dis Sci 35: 1358-1363, 1990)

非潰瘍性消化不良症状(nonulcer dyspepsia)とは、食事ではしばしば増悪するびまん性の心窩部不快感、随伴する腹満感、悪心、嘔吐とされているが、その病態生理は不明で、症状は似ていても幾つかの異なる成因の疾患群が混在していると思われる。著者らは、上記の症状を訴えるが消化性潰瘍は有さない255名を対象に、臨床症状と生検を含む内視鏡検査所見の検討を行った。殊に生検材料についてはアルシアンブルーの

特殊染色を施行し、mast cell数と症状との関連を検討した。mast cell数は、当初の100例の検討で、細胞数の多い順の上位10%の患者が強拡大視野に11個以上であったので、そこで一線を引いた。

強拡大視野に11個以上のmast cellがみられたのは225例中31例(13%)であった。31例の内視鏡所見と通常の組織所見はその他の症例と大差なかったが、mast cell数11個以上の症例は通常の抗潰瘍薬での治療が無効であったにもかかわらず、H₁受容体拮抗剤による治療後の経過が明らかな症例の大部分(79%)に症状改善がみられた。したがって、非消化性潰瘍患者で幽門前庭部の生検でmast cell数が増加している症例の胃部の不快な症状は、

H₁受容体拮抗剤投与により特異的に治しうるとしている。

【訳者コメント】最近、dyspepsiaの定義づけや病態生理の解明に関する研究報告が多い。著者らはmast cellが産生するヒスタミンが胃液分泌や腸管の運動性、血管の透過性を亢進させることから、胃のmast cell数の増加が不快な胃腸症状発現に重大な役割をしているとの仮説を立て、H₁受容体拮抗剤投与で、dyspepsiaが改善される疾患群があることを示唆している。事実の確認には大集団による研究が必要であるが、dyspepsiaの病態解明にとって興味ある研究である。

(愛知県がんセンター内視鏡部

伊藤克昭 抄)